九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代中国語の各種音声表記法について : その中国語授業の発音指導への応用

明木, 茂夫
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9703

出版情報：中国文学論集. 20, pp.1-15, 1991-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

現代中国語の各種音声表記法について
――その中国語授業の発音指導への応用――

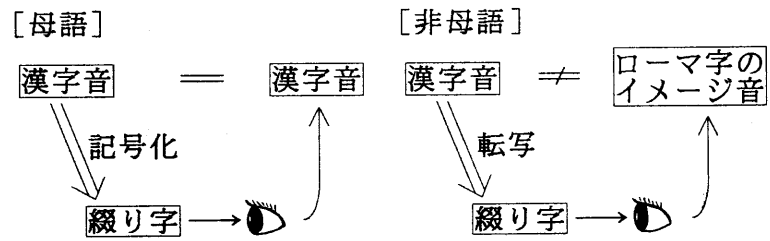
明　木　茂　夫

一

本論文は大学教養課程及びそれに相当するレベルの現代中国語の授業経営（Class Management）に於いて、その発音の指導に「漢語拼音方案」以外のローマ字音声表記法を参照する方法に関する一考察である。その対象としては、特にある程度の専門性をもって中国語を学ぼうとする者を想定し、より自然な発音を習得せしめる事を目的とする。

現代中国語の授業でしばしば行き当たる看過できない問題に、発音がローマ字の綴り字につられて不正確になることが挙げられる。ある漢字の読音はローマ字を以て表記されるのであるが、そのローマ字表記をもとに中国語を学ぶ時、そこでは学習者の既習のローマ字表音の持つ音声のイメージと、実際の漢字音のずれが問題となる(1)。漢語を母語とする者にとっては音声の転写の方向は［漢字音➡綴り字］であり、先行する音声にその表記としてローマ字を後から被せるのである。が、ローマ字を通して漢語を学ぶものにとってはその方向は［綴り字➡漢字音］であり、音声を直接に学ばないかぎりは、綴り字からその音声を再構成することになる。しかし、いかなるローマ字の表記法も、それだけで漢字音を完全に表現することはできず、言い換えれば綴り字から音声に還元する際、直接には綴り字のイメージ音に結びついてしまう危険性がある。即ち［綴り字➡ローマ字のイメージ音≠実際の漢字音］のように（図参照）。

図



中国語の授業経営に於ける発音指導は、入門段階に終わるのではなく、その後の授業のあらゆる段階にも常に継続して、ことあるごとに行なわれるべきことは、言うまでもない。発音の基礎を学び、ローマ字の綴り方にも慣れ、様々な表現法を学びつつある段階の学生は特に、そのローマ字への慣れが故に、発音がローマ字の綴りに引きずられてしまう傾向、さらに言えばローマ字の日本語読み風な発音になってしまう傾向にあると言える。しかし、ある程度の専門性をもって中国語を学ぶ者にとって、この段階にそのような「癖」をつけてしまうことは避けなければならず、言い換えればそのような読みの「癖」を矯正するチャンスはこの時にしかないとも言えるのである。

ところで既に見たようにローマ字表記の持つ表現性には自ずとある程度の限界がある。このローマ字の表現性の限界は、中国語授業経営に於いて常に教師が認識しつつ、またそれを通して学生にもローマ字の音声のイメージのみに頼らないよう、音声のイメージを音声として学ぶよう指導する必要があろう。この点を特に補うために有効な手段はあるであろうか？私はここで所謂「漢語拼音方案」式のローマ字表記法に加えて、その他の表記法による各種表音を適宜参照して、その綴り字の音声イメージの公約数として正確な漢字音を印象付ける方法が、有効ではなかろうかと考える。そうすることにより、それぞれのローマ字の表記法の含む欠点をある程度お互いに補い合うことができるからである。

二

さて、ここで参照するローマ字表記法は「漢語拼音方案」の他に、上に述べた目的に資するところが大きく、かつ一般にも工具書等で比較的馴染みがあることから、イギリス式（ウェード・ジャイルス式）及びフランス式（ヴィシェール式）を中心とする。その他にも「ドイツ式」（レッシング・オットマー式）、キリル文字による「ロシア式」（カファーロフ式）、さらに西洋文字ではないが、台湾で広く使用されており漢字をその根源とする「注音字母」も必要に応じて適宜参照することとする[(2)]。その他に「漢語拼音方案」の「草案」[(3)]や、「国語羅馬字」、「ラテン化新文字」[(4)]では現行の綴りとはかなり異なる綴り方を提出しており、これを参照して参考とするには、大変面白い資料となるであろう。

ウェード式は馴染みのあるものだから置くとして、ここでフランス式に関して若干の補足説明をしておきたい[(5)]。これはフランス極東学院院刊

（Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient）等で古くから用いられていたもので、以下のような特徴を挙げることができる。

(1)転写当時の音韻の通時的変遷の痕跡を留めている綴りがあること。

例えば〝ki〟〝k'i〟〝hi〟、〝tsi〟〝ts'i〟〝si〟の声母が用意されている[6]。また一部の入声〝—üe〟にも〝—io〟〝—iue〟の綴りが用意されている[7]。

(2)一部特殊な綴りが含まれていること。

例えばゼロ声母の場合〝nga〟〝ngai〟〝ngan〟〝ngang〟〝ngao〟〝ngen〟〝ngeou〟〝ngo〟等と綴る場合がある[8]。また「児」〝er〟音を〝eul〟と綴る[9]。

(3)フランス語の読音が一部の綴りに反映されていること。

例えばそり舌音〝zh〟〝ch〟〝sh〟〝r〟を〝tch〟〝tch'〟〝ch〟〝j〟と綴る。また介音〝u〟を有する韻母の場合、〝oua〟〝ouai〟〝ouei〟〝ouan〟〝ouen〟〝ouang〟等と綴る[10]。また〝zi〟〝ci〟〝si〟は〝tseu〟〝ts'eu〟〝seu〟（或いは〝sseu〟）と綴る、[11]等。

(4)耳で聞いた漢字音の音声イメージを綴りに反映させようとする傾向にあること。

例えば〝yan〟（〝ian〟）はすべて〝yen〟（〝ien〟）と、〝you〟（〝iu〟）はすべて〝yeou〟（〝ieou〟）と、〝liao〟は〝leao〟[12]と綴る、等。その点では音韻を整理し、表記を簡略化して、普通話の普及を旨とする「漢語拼音方案」とは音声表記の目的意識が異なると考えることができる。

これらの特徴を考えるに、まず音韻の通時的変遷の痕跡や特殊な綴りは、我々はまず排除しなければならない。その上でフランス語の綴りの影響は考慮に入れつつも、現代中国語の発音指導に参考として取り入れられるものが多くあると言うことができる。この点はウェード式、ドイツ式等の表記法にも同様のことが言えよう。

では、これらの各種表記法を参考として取り入れつつ、具体的な発音指導の方法について考えて行きたい。

三

(1)〝wen〟について

これは簡単なようで、中国語らしい自然な発音という点では、しばしば誤解を生じる音声である。即ちこれは、声母を伴わない場合は日本語音の「ウエン」のように、声母を伴う場合は「ウン」のように発音されがちな

のである。この音声を学生に印象付けるには以下のような説明のし方が効果的だと思われる。

1、〝wen〟と、〝声母＋un〟の韻母の部分は同じであることを確認させること。

この韻母が音韻論的には同じであると指摘すると、学生は多くの場合、一様に意外そうな反応を示す。その綴り字のみから見れば、全く違っているからである。そこで、この拼音表記の成り立ちが、

〝u〟＋〝en〟＝〝uen〟⇒〝wen〟

〝○＋uen〟⇒わたり音のｅを省略⇒〝○＋un〟

（以下〝○〟は声母を示す）

であることを再確認させることで、この音声イメージを印象付けることができる。

2、他のローマ字表記法ではどのような綴りを当てているかを示す。

ここではフランス式を例に挙げるのが最も適当であろう。フランス式では

〝wen〟⇒〝wen〟

〝○＋un〟⇒〝○＋ouen〟

と表記しており、ゼロ声母の場合は「漢語拼音方案」に同じだが、声母のある場合はすべて〝ouen〟と綴っている。先ほど述べたように、これは〝ou〟を以て〝u〟を表記しているからである。我々はこのフランス式の綴り方を逆手にとり、円唇音〝u〟の音声イメージをよく表現している表記として、これを学生に強く印象付ける事ができる。

さらにこれは注音字母では

〝wen〟⇒〝ㄨㄣ〟

〝○＋un〟⇒〝○＋ㄨㄣ〟

と表記する。これは〝ㄨ〟が〝u〟を、そして〝ㄣ〟が〝en〟を、それぞれ表すことを示しつつこれを紹介するとよい。それによりわたり音を含むこの音声の構造をよりはっきり印象付ける事ができよう。

3、そのうえで、〝ｕ〟が円唇音で、日本語の〝ウ〟よりも口を丸めた音声であることを強調しつつ、そこから自然に〝en〟に繋がるように発音を指導する。

このようにすることによって〝wen〟を日本語的に「ウエン」と、「エ」を明るく読んでしまう事や、〝○＋un〟を「ウン」のように、〝ｕ〟からｎ韻尾へのわたり音〝ｅ〟を断ち切ってしまう事を矯正でき、漢字音のイメージを印象付けられるのみならず、ローマ字があくまで音声を転写し

ているのであり、所謂当て字的要素が大なり小なり含まれる点を認識させることができると考えられる。

(2) 〝weng〟について

これに関しても(1) 〝wen〟と同様である。〝weng〟の綴りは元来

〝u〟＋〝eng〟＝〝ueng〟⇒〝weng〟

の構造を持つ。これに対して声母が付いた場合は注意を要する。この韻母は音韻的には、

〝○〟＋〝u〟＋〝eng〟⇒〝○＋ong〟

と成り立っている。〝ong〟綴り字は、この韻母の音声イメージを写したものである。が、それはこの韻母の音韻的成立を必ずしも反映していない。しかしながら、実際の発音は〝u＋eng〟を明確に区切って発音するわけでもない。

そこで指導の手順としては(1)の場合と同様、〝weng〟と、〝声母＋ong〟の韻母の部分は音韻論的には元来同じなのだということを指摘するのが有効だと思う。そうすると、学生は多くの場合、一様に意外そうな反応を示す。これにより〝ong〟が必ずしも日本語的な「オ」ではなく、唇を丸めた音声であることを印象付ける事ができる。

ではこれが日本語的な「オン」ではないとすると、どのような音声として指導すべきであろうか。藤堂明保氏は『中国語概論』[13]第二章北京語音韻論第15節「拼音の eng と ong」及び第16節「ung か ong か」で、次のように述べておられる。

> 拼音で〝eng〟と書くのは、じつは／əng／であることはご承知のとおりです。その／əng／の前に唇の丸め〝w〟をそえると／wəng/という音韻ができます。それが拼音の〝ong〟なのです。…(中略)…（第15節「拼音の eng と ong」）
>
> 唐代までの中国語では〝東～冬、公～攻〟などを区別しました。当時の発音字引である「韻書」では、前者を東韻の字（ung)、後者を冬韻の字（ong）として区別しています。しかし唐の中ごろ以後、この区別はくずされてきて、中世・近世にはいると、まったく同じ韻母となりました。区別がなければ、ung と書こうと ong と書こうと「かまわない」わけです。中国の初期の拼音では ung 型を採用していましたが、今日の拼音では ong 型にしていますね。ところが教師が学生を「東トオングではなくトウングですよ」と直している風景を見かけることがありますが、「よけいなこと」です。音韻論では前にのべたとおり、この型を／wəng／という形に整理しています。wの

部分を特に強めれば〝ウング〟ときこえ、wə の部分を o と発音すれば〝オング〟となるわけで、「どちらでもよい」のです。（第16節「ung か ong か」）

これを要するに、〝ung〟と〝ong〟という音韻の対立がないかぎり、これを区別して発音し分ける必要はなく、円唇を強めに発音しようが弱めに発音しようが、意味の伝達に支障はないということである。「漢語拼音方案」式の〝ong〟という表記は、円唇音たる〝u〟音に非円唇たる〝eng〟が結合した音声イメージに、〝ong〟の綴りを当てていると考えることができる。

もちろんこれが日本語的な「オン」に読まれようとも、意味の伝達には全く支障はない。しかしより自然な中国語という観点からは、少なくともローマ字の日本語読みとは音声イメージが異なる事を学生に認識させることが、やはり理想的であろう。

ではこの音声を他の表記法に見ると、ウェード式やドイツ式では〝○＋ung〟の綴りを与えている。注音字母では〝ㄨㄥ〟で、〝ㄨ〟は〝u〟、〝ㄥ〟は〝eng〟を表すので、〝u＋eng〟という表記になっていることが分かる。「国語羅馬字」式はゼロ声母の場合には〝ueng〟型の綴りを、有声母の場合は〝○＋ong〟型の綴りを与えている[14]。さらに「漢語拼音方案」の草案に於いては、この綴り方は未だ確定しておらず、〝weŋ〟（〝uŋ〟）の綴りを与えていて、〝o〟の字は使用していない。

こうした表記法を参照させることによって、〝weng〟と〝○＋ong〟の韻母の部分が元来同じであることを認識させ、さらに「ウエン」のように「エ」がはっきりしすぎる発音や、「オン」のように「オ」が強すぎる発音を是正し、円唇音たる〝u〟から〝eng〟に自然に繋がる発音のイメージを習得させることができる。

(3) 〝iong〟について

〝iong〟の音も、そのローマ字の音声イメージと実際の音がずれやすいと考えられる。この音声に各表記法がいかなる表記を与えているかを、次に列挙したい（括弧内は有声母の場合の綴り）。

ウェード式　yung（iung）
フランス式　yong（iong）
ドイツ式　　yung（iung）
注音字母　　ㄩㄥ＝ü＋eng

また上述の「漢語拼音方案」の草案では、これに〝yŋ〟の表記を与えている[15]。

「漢語拼音方案」の〝iong〟の綴りからは唇を左右に強く引いた「イ」に唇を丸めた「オ」を加えた「イオン」という音声がイメージされるが、実際には漢語拼音方案やフランス式の如く〝iong〟とも綴ることができるし、ウェード式やドイツ式の如く〝iung〟とも綴ることが可能な音声なのである。こうした表記法の比較により、ローマ字の音声イメージが必ずしも実際の音声に一致しないことを認識することができる。

さらにこの音声は音韻論的には〝ü＋eng〟という韻母の構造を持つのである。注音字母はこれを反映した表記になっている。故に日本語的な「イ」・「オ」に相当する母音は含まれておらず、口を窄めた〝ü〟に〝eng〟を続ければより自然な発音が得られるのである。注音字母や「漢語拼音方案」草案の表記を示して参照させることにより、自然な音声イメージに近付けることができよう。

(4)〝yun〟について

これは特に初歩の学生がローマ字の音声イメージから、有声母の場合もゼロ声母の場合も、日本語的に「ユン」のように発音する過ちを犯しやすい綴りである。これに関しては、〝yu〟が〝ü〟に対応する表記である事を確認させるべきことはもちろんである。ウェード式やドイツ式はウムラウトの省略なく〝yün〟の綴りを与えていることが参考となる。またフランス式の有声母の場合は、

〝jun〟⇒〝tsiun〟

〝qun〟⇒〝ts'iun〟

〝xun〟⇒〝siun〟／〝hiun〟[16]（或いは〝hsiun〟）

と綴られることも唇を窄める音声イメージの参考にはなろう[17]。

その上で「注音字母」が

〝ㄩㄣ〟＝〝ü＋en〟

の構造になっていることを指摘することが有効であると考える。なぜなら、〝ü〟から〝n〟に直接的に繋がるのではなく，唇を窄めた〝ü〟から〝en〟になだらかに繋がるイメージを、学生に明確に持たせることができるからである。

(5)〝en〟と〝eng〟について

以上の(1)〜(4)の発音の指導要領を要するに、いずれも〝en〟と〝eng〟の扱いがこれらの核になると言える。この点から〝en〟と〝eng〟の発音を正確に指導することが、何よりもそれらの発音の基礎になると言えよう。

その際、〝n〟は舌尖で歯茎を閉じる音であること、それに対して〝ng〟は口蓋を開けて鼻に抜く音であることを、まず〝an〟と〝ang〟で

習得させる。さらに〝en〟の場合は〝n〟の影響で〝e〟が前寄りの若干明るい音に、〝eng〟の場合は〝ng〟の影響で〝e〟が後寄りの若干暗い音になることを認識させる。そしていずれもローマ字の音声イメージからくる「エ」では必ずしもないことを確認させる。このような手順が有効かと考えられる。

また同時に〝en〟と〝eng〟に、ウェード式が〝ên〟と〝êng〟の綴りを、ドイツ式が〝ën〟と〝ëng〟の綴りをそれぞれ与えていることを参考として示すと、音声イメージに資するところがあるであろう。

この点を踏まえて考えると、さらに

(6)〝in〟と〝ing〟について

これは音韻論的にはそれぞれ〝i＋en〟、〝i＋eng〟の構造を持つ。しかしローマ字の表記は一様に〝yin〟(in) の綴りを当てている[18]。この点を音韻論的に表記に取り込んでいるのは「注音字母」である。

ㄧㄣ＝i＋en

ㄧㄥ＝i＋eng

それぞれの字母が〝i〟〝en〟〝eng〟に対応することを示しつつこの表記を紹介すれば、この音韻構造を認識させる事ができよう。のみならず、これは〝n〟と〝ng〟の発音の区別を習得させるのにも役立つと考えられる。すなわち〝n〟と〝ng〟の発音の区別があやふやな場合、特に〝in〟と〝ing〟に於いて顕著なのである。

例えば一般の中国語会話中、「行！」のように〝ing〟韻母の文字が単独で比較的強く発音されるとき、その〝i＋eng〟の〝eng〟の部分がかなり明瞭に聞こえる。このような音声イメージを頭に置いて、〝i〟から〝e〟を介して〝ng〟になだらかに繋がるように発音すれば、これを〝yin〟（＝〝ien〟）と明確に区別して認識させる事ができよう。同様にして有声母の場合も、注音字母を示して〝○＋i＋en〟、〝○＋i＋eng〟と認識させることが、その区別の習得に有効だと考えられる。

また〝in〟と〝ing〟は、ロシア式では〝ИНЬ〟[19]と〝ИН〟と綴られる。［ŋ］に相当する音声がロシア語にないため便宜的に〝ing〟に〝ИН〟［in］が当てられ、軟音化された〝ИНЬ〟の方が〝in〟に当てられているのは面白い。これもキリル文字の知識がある程度ある場合には、音声イメージの構築に資するところがあろう。

(7)〝ri〟について

反り舌音である〝ri〟を日本語式に「リ」と読む誤りはしばしば見られるものである。ではこの〝ri〟は、他の表記法ではいかなる表記になって

いるかを、以下に整理してみる。

ウェード式	jih
フランス式	je
ドイツ式	jï
ラテン化新文字	rh
国語羅馬字	rhy
漢語拼音方案草案	r
注音字母	ㄖ

これらを利用しつつ、反り舌音の音声イメージを印象付ける手順を考えてみたいと思う。

1、〝ri〟は「リ」ではない

ウェード、フランス、ドイツの各方式はそれぞれ頭に〝j〟の文字を与え[20]、それにＩＰＡの［ɿ］の母音をそれぞれ〝ih〟〝e〟〝ï〟の形で付け加えているのである。この表記法を参考として引き合いにだすと、学生はやはり多く意外そうな反応を示す。〝ri〟の〝r〟が「ラリルレロ」の子音とは違う音であり（むしろ日本語の「ラリルレロ」が［ɾ］で、〝r〟の音声イメージから遠い音なのである）、〝i〟が「アイウエオ」の「イ」ではないことを印象付ける事ができる。

2、〝ri〟は反り舌音である

反り舌音の発音の指導は〝zhi〟〝chi〟〝shi〟〝ri〟の順にばかり行なわず、私はまず〝shi〟から始めてみるのも有効な方法であると思う。〝shi〟は四つの反り舌音の中では最も取りつきやすい音であるし、その際に〝shi〟と〝xi〟を比較させて、〝xi〟が口腔の非常に浅い位置で調音されるのに対して〝shi〟が非常に深い位置で調音されることを認識し、そこから反り舌音の音声イメージを把握させることができるからである。〝shi〟の音声イメージが把握できたところで、その唇と舌の形状を保ちつつ〝zhi〟を発音させ、それを有気音化して〝chi〟を発音させる。そしてそれらの声母の調音される位置が近いことを認識させながら、〝ri〟に移るのである。

そしてその際「ラテン化新文字」と「国語羅馬字」の綴りを参照することが、その音声イメージを把握する助けとなる。それらの表記法によると、四つの反り舌音はそれぞれ：

zh　ch　sh　rh

となっており、その綴り方が一貫しているのが分かるであろう。よって〝rh〟の綴りはそれが他の反り舌音と同系の音声であることを印象付け、

また同時に〝rh〟という綴り字自体の音声イメージも、〝r〟を安易に「リ」と読んでいた学生に対する発音矯正に資するところが大きいであろう。

(8)〝ren〟について

前項(7)の〝ri〟と(5)〝en〟の項により、〝ren〟も同様に指導できる。とかく日本語式に「レン」と発音されがちなこの音であるが、ウェード式・フランス式・ドイツ式はそれぞれ

ウェード式　jên
フランス式　jen
ドイツ式　　jën

となっている。これによって〝r〟は「リ」ではなく、〝j〟とも表記できる反り舌音であること（もっとも英語・フランス語の〝j〟でイメージされるほどの音の摩擦はないが)、そして〝ên〟〝en〟〝ën〟は必ずしも「エン」ではないことを、それぞれ印象付けることができる。また「ラテン化新文字」では〝rhen〟であり、これによっても反り舌音をイメージ付けすることができよう。

(9)〝ai〟について

中国語の二重母音は、例えば〝ai〟は〝a＋i〟というはっきり切れる音ではなく、二つの母音を非常に滑らかに繋ぐ音である。その結果主母音〝a〟から子音韻尾〝i〟に至るのに、その中間の音まで至って消えてしまうという曖昧な音となる。この場合の二重母音のなめらかなイメージを印象付けるにはいかなる方法があるであろうか？

ローマ字による表記は全て〝ai〟という綴りを当てざるを得ない。ここで少々変則的だが、日本語の片仮名による表記の例を参照してはどうだろうか。一般旅行者向けの『旅行会話』の類のハンドブックには、片仮名により発音が記されている。〝ai〟は普通はもちろん「アイ」と表記するわけだが、いくつかの本では「アエ」の振り仮名を採用している[21]。〝ai〟を「アエ」と書くには勇気を要するかもしれないが、しかしこれは中国語の音声イメージの表現という点からすると、なかなかイメージを捉えた表記ということができる。よって、このように〝ai〟は「アエ」と書く場合もあるのだ、ということを参照させることによって、二重母音の音声イメージを印象付ける事ができるのである。

他の二重母音に関しても同様に、例えば〝yue〟は

ウェード式　yüeh
ドイツ式　　yüä

を参照させれば、これが〝ü〟＋〝e〟を滑らかに繋ぐ音であって、〝yu〟を片仮名の「ユ」と読んでいた学生に、これが「ユエ」ではないことを印象付ける事ができよう。

⑽〝yao〟について

三重母音も二重母音と同様、各母音を滑らかに繋ぐ音である。これを日本語式に「ヤオ」と切って読むことを防ぐために、「漢語拼音方案」の草案とドイツ式の綴りを参照するとよい。

「漢語拼音方案」草案　jau
ドイツ式　yau

また、フランス式は〝liao〟のみ〝leao〟と綴っている（他の声母の場合は〝iao〟）。これにより、〝yao〟が〝jau〟とも〝yau〟とも、声母によっては〝eao〟とも綴れる音声で、全体が滑らかに発音させることが了解されよう。

〝you〟についても同様で、

「漢語拼音方案」草案　ju
ウェード式　yu
フランス式　yeou

〝i〟＋〝ou〟が滑らかに繋がり、「ヨウ」でも「ユー」でもない音声イメージが了解されよう。

また〝wei〟についても同様である。特に有声母の場合〝ui〟と綴られることから「ウイ」と読まれがちであるが、

国語羅馬字　○＋uei
フランス式　○＋ouei

であることを参照させれば、〝u〟と〝ei〟が滑らかに繋がる音声イメージが了解されよう。

結　語

中国語の音声のローマ字表記の機能には、元来二つの傾向があると考えることができる。一つは「記号的機能」、いま一つは「転写的機能」とでも呼ぶことができようか。

「漢語拼音方案」はそもそも識字と普通話の普及のために作られたもので、音韻を整理して、それぞれをあるローマ字の組み合わせ（拼写）を以て代表させることを旨とする。そのために表記自体は、各音声を代表するに十分な程度に簡素化されている。「漢語拼音方案」は「記号的機能」の

傾向が非常に強い表記法と言えるであろう。

それに対して「転写的機能」は、それぞれのローマ字がある音声を代表する機能を保ちつつ、その機能を以て中国語の音声を表現しようとする、すなわち音声をローマ字に転写しようとする。よって、そのローマ字の綴りから想起される音声が、実際の中国語音に近くなるようにという意識が存在する。その欠点は綴りの表記が非常に煩雑になる点である。

日本語の片仮名により中国語に音注すること（読み仮名）は、外国語の字母への転写という点からは後者に近いと思われるが、日本語と中国語の音韻の差異と「仮名」の表記の機能からして、実際にはほとんど前者としてしか機能し得ない点は、注意を要する。

このように考えると、発音指導の際「漢語拼音方案」式ローマ字を補ってその他のローマ字等を参照することは、「漢語拼音方案」の記号的ローマ字を、機能の面から転写的表記で補うことに他ならない、と言うことができる。一般に初歩の学生はローマ字の綴り字から音声を再構成しようとする傾向にあり、その再構成を「漢語拼音方案」式ローマ字のみに依拠するには不足する点がある。実際の授業経営に於いては、教師がこのローマ字の機能を常に認識しておく必要があると言えるであろう。

この点を突き詰めて考えるならば、最も合理的なのはＩＰＡ・国際音標文字を用いることだということになる。一つの記号が一つの音に、音声学的に対応するからである。よって、音声学の基礎的な知識をある程度与えた上でならば、ＩＰＡも授業経営上大きな使用価値を持つと言える。但し学生にとって目新しい記号を持ち出してくる必要性を考慮するならば、既に考察した各種表記法の参照は、既存の見慣れたローマ字を主に使用する点で、利用価値が高いと言えよう。その簡便さのみならず、ローマ字への転写のし方が一通りではないことを認識させ、その点を発音指導に利用できるからである。

さらに、この参照法の実際の運用に関しては、特に初歩の段階を終えてローマ字の読みにある程度慣れてきた段階の学生が、往々にしてローマ字の綴りに発音が引きずられてしまうのを矯正することを第一義とすべきである。但し、これは特にある程度の専門性をもって中国語を学ぶ学生に対して有効なのであって、そうでない場合、例えば第二外国語としては、却って混乱を来すおそれがある。

そもそも、会話が通じることを第一義とし、細かい発音の差異は切り捨てるか、或いは通じる上にもより自然な発音をめざすか、という授業経営の方針により、個々の発音指導の方法も自ずと異なってくる。例えば、有

気・無気音の対立は、それぞれが日本語的な清音・濁音に発音されようとも、その対立さえ明白ならば意味の伝達に支障はない。このように、個々の発音に正確を期さずとも、通じることを第一義とすることも、実に重要な指導方針であることは言うまでもない。これは、中国語を必ずしも専門としない学生に対する指導方法としては、特に有効である。

既に考察した表記法の参照法は、このような指導上の観点から、より自然な音声イメージを定着させるために行なわれるべきものである。よって、授業の様々な段階、様々な場面に於いて、ローマ字読みに行き当たるごとに、教師が音声により手本を示す発音指導の補いとして、ことあるごとに引き合いに出すかたちで参照されるのが理想的なのである。また、学生が特に興味を示す場合以外は必ずしも、特にそれが「何式」の表記法であるかを示す必要はないであろう。例えば、「これは昔はこのように綴っていたこともある音なのだ」というように。

注　釈

（1）例えばソシュールは『一般言語学講義』で、綴り字の書法と実際の発音が不一致となる要因として「言語は休みなく進化するのにたいして、文字は不動のまま残る傾向がある」ことと、「ある民族が他民族からアルファベットを借用するときに、この書法体系の源泉が新しい機能にあまりなじまない場合がよくある。方便にたよらざるをえない」ことを挙げている（参照、トゥリオ・デ・マウロ著山内貴美夫訳『「ソシュール一般言語学講義」校注』而立書房1976年　序論第Ⅳ章・4書法と発音の不一致の諸原因）。中国語音のローマ字表記も、その後者に当るもととしてと考えることができる。

（2）各ローマ字表記法に関しては、中国語学研究会編『中国語学事典』江南書院1958年第Ⅺ章付録〔5〕「各種音標文字及び中国語音声転写法の対照表」を参照。

（3）中国文字改革委員会擬訂『漢語拼音方案（草案）』人民教育出版社1956年　北京

（4）前掲『中国語学事典』付録〔5〕「対照表」を参照。またここに挙げた各表音法の歴史については

黎錦熙著『国語運動史綱』商務印書館1934年　巻三・四

香坂順一・イズミオキナガ著『漢字の歴史』江南書院1958年　Ⅲ漢字からローマ字へ

芝田稔・鳥井克行共著『新しい中国語・古い中国語』（中国語研究学習双書４）光生館1985年　II中国語表音化の歴史
等を参照。
（５）フランス式に関しては、その表記法を前掲『中国語学事典』付録〔５〕「対照表」に参照した他、具体的な漢字の転写例に関しては『中法漢学研究所通検叢刊』（成文出版社1968年　台北）の各種通検の「法文拼音検字」の項を参照した。
（６）〝ji″ ⇒己 〝ki″
　　⇒即 〝tsi″
　〝qi″ ⇒其 〝k'i″
　　⇒七 〝ts'i″
　〝xi″ ⇒希 〝hi″
　　⇒西 〝si″
のように。これを要するに〝k-″〝k'-″〝h-″の「団音」と、〝ts-″〝ts'-″〝s-″の「尖音」という歴史的音韻に対する綴りが用意されているのである。以下、各種韻母が付く場合も同様。
　さらにこれを以て現代音を表記する場合、〝ji″と〝qi″に関しては、
　〝ji″ ⇒ 〝tsi″
　〝qi″ ⇒ 〝ts'i″
と、また〝xi″に関しては、〝hi″と〝si″という綴りを併せて
　〝xi″ ⇒ 〝hsi″
とそれぞれ表記する（前掲『中国語学事典』付録〔５〕「対照表」及び『中法漢学研究所通検叢刊』の各種通検の凡例参照）。
（７）例えば〝jue″ ⇒覚〝kio″（もと―k韻尾）
　　⇒決〝kiue″（もと―t韻尾）
よって〝jue″には〝kio″（覚）〝kiue″（決）〝tsio″（爵）〝tsiue″（絶）の四つの綴りが用意されていることになる。〝que″〝xue″に関しても同様。
（８）前掲『中法漢学研究所通検叢刊』の各種通検の凡例参照。
（９）フランス語の場合〝r″の字の読音は〝er″の音声イメージと大幅に異なる。その代わりに単に便宜的に〝l″が置かれていると考えてよいだろう。ちなみに『西儒耳目資』も〝ûl″と表記している。
(10)介音〝u″を、フランス語の〝ou″の読音を以て表記しているのである。
(11)〝eu″の綴り字のフランス語音［œ］を以て、中国語の〝zi″〝ci″

〝si〟の〝ｉ〟（ＩＰＡの［ɿ］）に当てているのである。音声イメージが近いからであろうか。

(12)〝diao〟〝tiao〟〝niao〟は〝tiao〟〝t'iao〟〝niao〟。

(13)藤堂明保著『中国語概論』大修館書店1979年、新訂版藤堂明保・相原茂共著1985年

(14)「国語羅馬字」は声調符号は使わず、声調によって綴りを変える方式を採っている。例えば〝tong〟は各声調で〝tong〟〝torng〟〝toong〟〝tonq〟と表記する。その表記法は、前掲『国語運動史綱』巻三第三回（一）「大学院公布国語羅馬字」及び『新しい中国語・古い中国語』第II章・5「国語ローマ字の発表」に詳しい。

(15)「漢語拼音方案」草案では［ｙ］音に〝ｙ〟を当てている。

(16)これは第二章で述べた通時的変遷の痕跡を残す綴りである。

(17)フランス式では［ｙ］韻母の部分に〝iu〟の綴りを当てている。

(18)「漢語拼音方案草案」ではそれぞれ〝jin〟、〝jiŋ〟を当てている。

(19)〝b〟は軟音記号。〝H〟（ローマ字ではｎ）に着いて、ｎを軟子音化する。

(20)英語やフランス語の綴りでは〝ｊ〟は［dʒ］を、ドイツ語では〝ｊ〟は［ｊ］をそれぞれ表すが、この場合［dʒ］と［ｊ］の双方の音声イメージから、それぞれの転写がなされていると考えていいだろう。

(21)例えば、安念一郎著『中国語きまり文句集 ── どうしても必要な表現528 ──』金星堂1973年